

2023年12月

【学力向上事業】

ステップアップ調査 モデル実施報告書



小田原市教育研究所

目次

1	ステップアップ調査とは	1
2	調査の特長	1
	(1) 一人ひとり「伸び」を経年で見える調査	
	(2) 学力の「伸び」を支える項目「学習方法の習得」「非認知能力」等の把握	
	(3) 全国学力・学習状況調査との違い	
	(4) 他自治体での実施状況	
3	ステップアップ調査モデル実施概要	4
	(1) 調査の目的	
	(2) 調査対象	
	(3) 調査概要	
	(4) 調査実施日等	
4	調査結果の概要（令和3～5年度）	6
	(1) 学力レベルの経年変化（伸びの状況）	
	(2) 学力が伸びた児童生徒の割合	
	(3) 学力の伸びを支える学級風土について	
	(4) 学力の伸びを促す「主体的・対話的で深い学びの実施」「学習方法」について	
	(5) 学力の伸びを促す「非認知能力」について	
5	各校の調査結果を活用した取組事例	8
	＜酒匂小学校の取組＞	
	＜泉中学校の取組＞	
6	保護者の声（保護者アンケートより）	11
7	モデル校への支援	13
	(1) ステップアップ調査についての説明	
	(2) 活用促進	
8	モデル実施を通して見えた成果	16
	(1) 教職員の意識の変容	
	(2) 児童生徒に合った指導や言葉かけ	

	<u>(3) 児童生徒の意欲の創出</u>	
	<u>(4) 小中で連携した指導の実施</u>	
9	モデル実施を通して見えた課題	18
	<u>(1) 教員の負担</u>	
	<u>(2) 中学3年生の調査結果の活用について</u>	
	<u>(3) 提供される帳票の読み取りや分析</u>	
	<u>(4) 全国学力・学習状況調査との重なりによる負担</u>	
10	令和6年度以降の調査実施について	20
	<u>(1) 実施方法</u>	
	<u>(2) 実施・活用支援</u>	
	<u>(3) 検証体制</u>	

1 ステップアップ調査とは

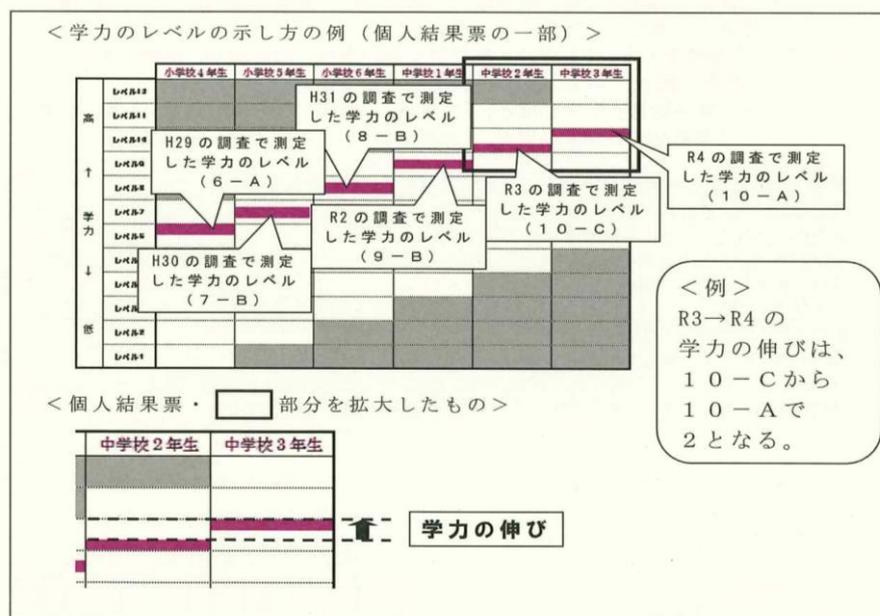
一人ひとりの学力やよさを伸ばすためには、学力の「伸び」を経年で測定し、そのデータをエビデンスとして、授業改善及び個に応じたきめ細かい指導に生かすことが有効である。本市が令和3年度よりモデル実施しているステップアップ調査は、埼玉県が平成27年から開始した埼玉県学力・学習状況調査を共同実施するもので、一人ひとりの学力の伸びを継続して把握できる自治体初の調査である。

2 調査の特長

(1) 一人ひとり「伸び」を経年で見る調査

本調査では、問題に難易度を設定し、どのくらいの難易度の問題に正答できるかで学力を捉えている。全く同じ問題を一部出題したり、類似の問題で同じ難易度の問題を出題したりし、同一難易度の問題の正答状況を追うことで、**一人の子どもの異なる年度の学力を図ることが可能**になっている。(IRT方式¹⁾)

本調査では、図1のように、学力は「学力レベル」で表される。学力レベルは1～12まであり、それぞれのレベルをさらに細かく3層(高い順にA→B→C)に分け、36段階になっている。つまり、児童生徒には、1-Cから12-Aまでの36段階で提示され



る。学力レベルの差で測ることにより、学力の伸びを捉えることができる仕組みになっている。



図1 学力のレベルの示し方

¹ IRT（項目反応理論）とは、出題するすべての問題に同一尺度で難易度を設定し、昨年度と比較して、どのくらいの難易度の高い問題に答えることができたかで、学力の伸びを捉えるテストである。OECDが進める国際的な学習到達度に関する調査（PISA）やTOEFL（英語能力試験）等で採用されているテスト方式。

一人ひとりの学力の伸びを捉えることにより、図2のように一人ひとりの状況を把握ができ、適切な指導・支援につなげていく。

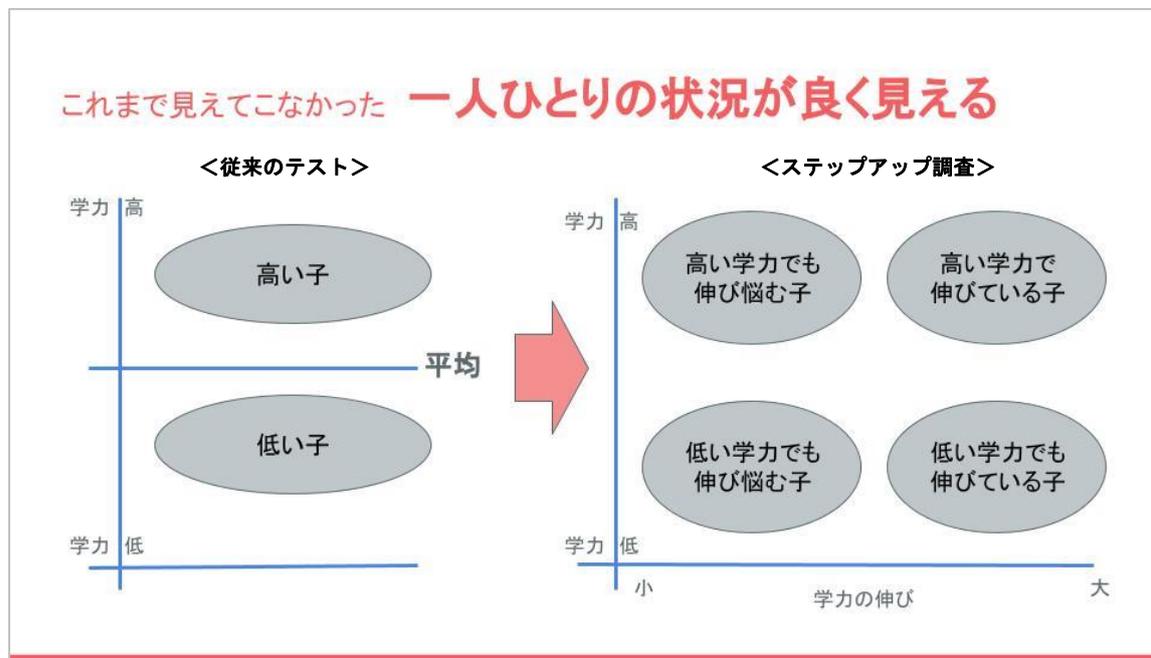


図2 ステップアップ調査で把握する状況

(2) 学力の「伸び」を支える項目「学習方法の習得」「非認知能力」等の把握

学力向上につながる項目、「主体的・対話的で深い学びの実施」「学級・学年経営」「学習方法」「非認知能力」の4項目について質問紙調査で把握することができるのも大きな特長の一つである。それぞれの項目の関係は図3に示した通り相関があり、各項目について向上させることが学力の向上につながっていることが明らかになっている。

本調査では、こうした項目を数値化して把握し、それをエビデンスの1つとして振り

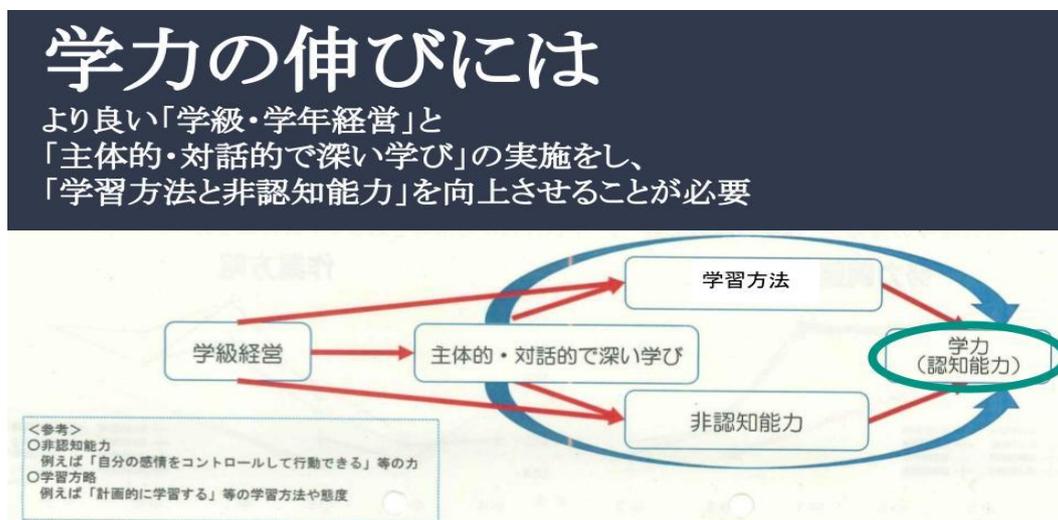


図3 学力の伸びを支える項目の相関

返り、授業・指導改善に役立てることをねらいとしている。「学習方法の習得」「非認知能力」の具体については図4の通りである。

学習方法とは？ 子どもが学習効果を高めるために 意図的に行う活動(態度を含む)		非認知能力とは？ 感情をコントロールして行動する力など パーソナリティに関係する力	
柔軟的方略	自分の状況に合わせて学習方法を柔軟に変更していく活動	自己効力感	自分はそれが実行できるという期待や自信
プランニング方略	計画的に学習に取り組む活動	自制心	自分の意思で感情や欲望をコントロールすることができる力
作業方略	ノートに書く・声に出すといった、作業を中心に学習を進める活動	勤勉性	やるべきことをきちんとやることができる力
認知的方略	より自分の理解度を深めるような学習活動	やりぬく力	自分の目標に向かって粘り強く情熱をもって成し遂げられる力
努力調整方略	「苦手」などの感情をコントロールして学習への意欲を高める活動	向社会性	外的な報酬を期待する事なしに、他人や他の集団を助けようとしたり、人のためになることをしたりする力

図4 学力の伸びを支える各項目の具体

(3) 全国学力・学習状況調査との違い

全国学力・学習状況調査については、調査年度の集団としての児童生徒の学力の現状を把握することには適しており、さらに児童生徒は自分の学力を平均と照らし合わせ把握することができる。一方、本調査は、平均と比較するのではなく、前年度の自分の学力と比較してどれだけ伸びたかを把握する調査であり、**学力が高いか低いかに関わらず、自分の伸びをみて自分の学習の仕方などを振り返ることを目的としている。**

教員にとっては、全国学力・学習状況調査は、当該年度の児童生徒の結果を、学校の傾向として整理し、どう授業改善していくかを考えることができる。本市でも、全国学力・学習状況調査の結果から全市的な傾向をつかみ、各学校に指導方法の工夫・改善について周知するとともに、各校は、各学校の結果から学力向上プランを作成し、当該年度の児童生徒の結果から導き出した指導方法について校内で共有するなどの取組を行ってきた。

一方、本調査は、図5に示したとおり、当該年度の学年の結果から導き出す指導法を汎用するのではなく、**学年・学級ごと、さらには、一人ひとり**を分析することにより、**前年度1年間の授業・指導を振り返り、工夫・改善**をすることをねらいとしている。つまり、教員一人ひとり関わった児童生徒の結果をもとに、PDCAサイクルを回し、より良い指導につなげるものである。

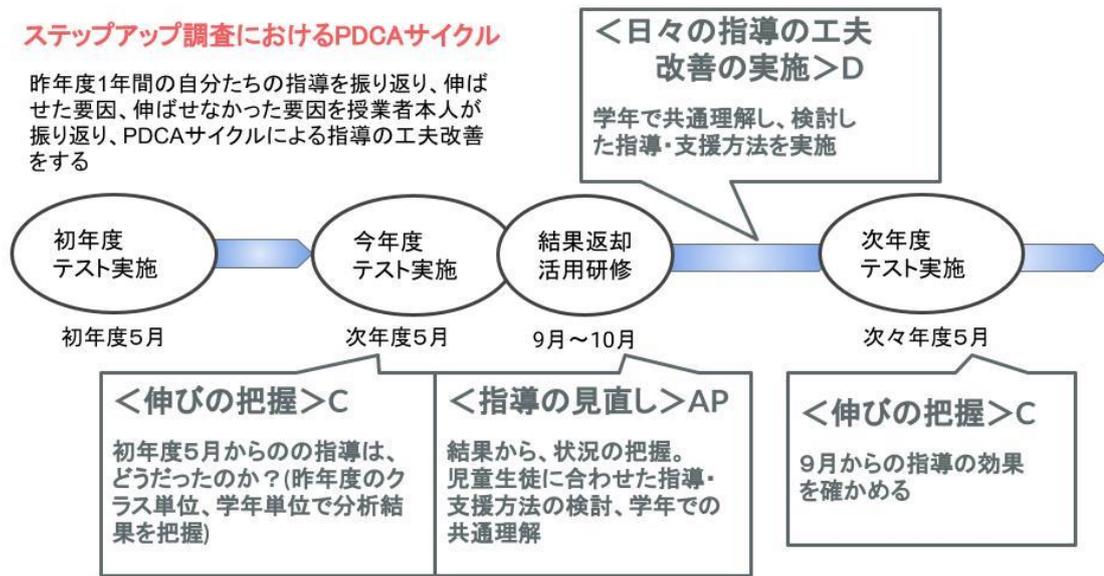


図5 ステップアップ調査におけるPDCAサイクル

(4) 他自治体での実施状況

令和5年度は、148市町村で調査を実施している。令和5年度から千葉県が参加し、令和6年度からは南足柄市も全校実施の予定である。神奈川県では、秦野市、小田原市で実施しているが、横須賀市、川崎市などは独自で学力調査をしており、**エビデンスに基づいた授業改善の取組の一環として自治体ごとに独自に学力調査を実施するところは増えてきている。**

3 ステップアップ調査モデル実施概要

(1) 調査の目的

一人ひとりの学力やよさを伸ばすため、学力の「伸び」を経年で測定し、そのデータをエビデンスの一つとして、授業改善及び個に応じたきめ細かな指導に生かすため、本調査を実施。本市で全校展開するにあたっての課題を明らかにするため、令和3年度より2中学校区（中学校2校・小学校4校）で3年間モデル実施を行うもの。

(2) 調査対象

2中学校区 酒匂中学校区（酒匂中学校・酒匂小学校・富士見小学校）及び泉中学校区（泉中学校・東富水小学校・富水小学校）計6校に在籍する児童・生徒

（令和5年度は、約1800名 調査委託料約990千円）

(3) 調査概要

○児童生徒に関する調査

小学4年生から中学3年生 国語、算数・数学、児童生徒質問紙
教科に関する調査は各教科1単位時間（小学校40分 中学校45分）
質問紙調査は小中学校共に40分程度

○学校及び市町村教育委員会に関する調査

学習意欲、学習方法及び非認知能力、生活習慣等に関する事項

(4) 調査実施日等

○実施日

当該年度に教育委員会が指定した期間²の中で学校の都合の良い日

○結果返却期間

9月中旬～10月上旬 児童生徒への結果返却期間

○各学校での振り返り

活用研修にて、児童生徒の学力状況の把握、指導方法の工夫・改善の検討

○まとめ

各学校で、ステップアップ調査の成果と課題のまとめ、保護者アンケートの実施

【令和5年度のスケジュール例】	4月4日～	WEBマニュアル掲載
	4月21日	さくら連絡網にて保護者に調査実施を通知
	5月2日	調査資料到着
	5月9日～17日	調査実施（期間内で学校が選択した日）
	5月19日	調査資料の回収
	9月6日	各学校へ調査結果データの送信
	9月中旬～10月上旬	児童生徒へ個人結果票配付
	9月15日～10月20日	調査結果を踏まえた活用研修会の実施 （期間内で学校が選択した日）
	10月20日～31日	保護者アンケートの実施
	10月31日	泉中学校区幼小中交流研究会 講師講話「非認知能力を伸ばす学びのスタイル」
11月6日	各校からの報告書の提出	
11月31日	酒匂中学校区幼小中交流研究会 講師講話「幼児教育と学校教育をつなぐ学びのスタイル －教えるから学ぶへー」	

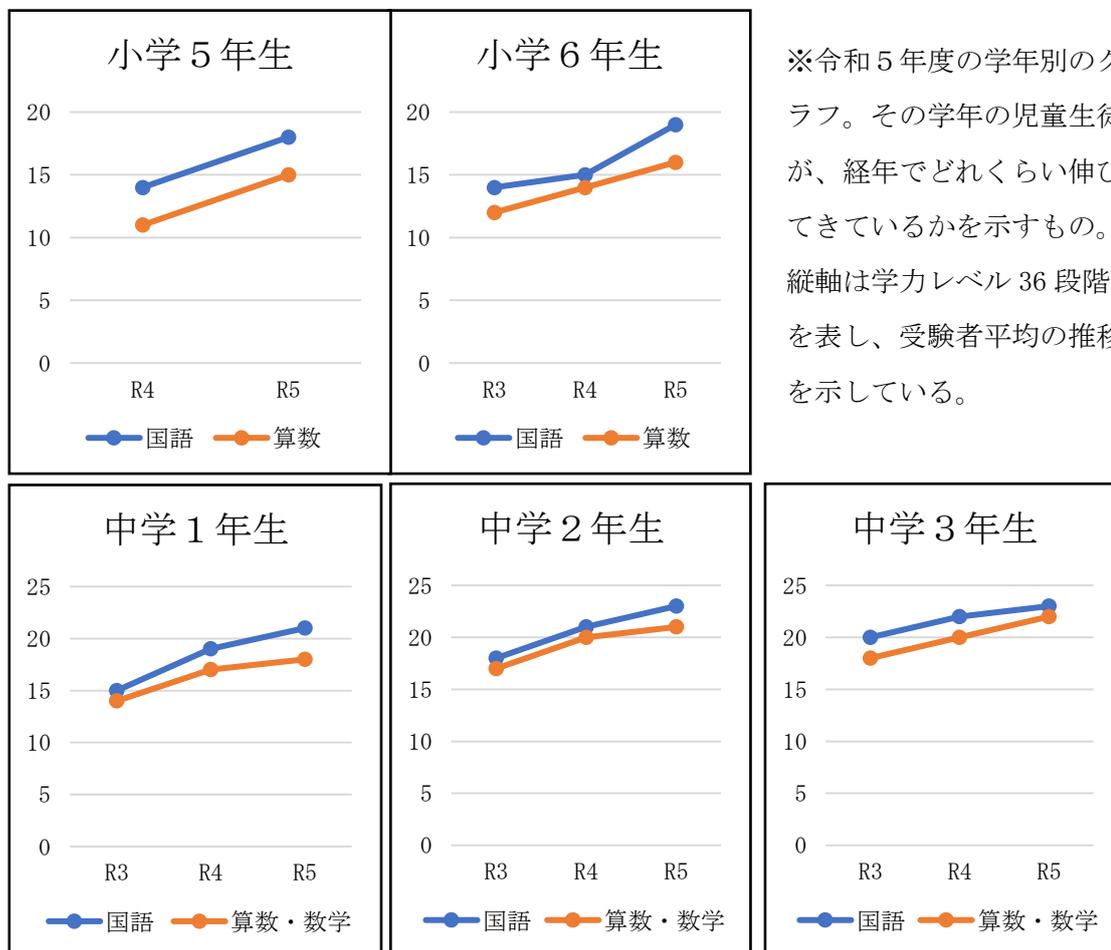


² 全国学力・学習状況調査が4月にあるため、重ならないよう5月に2週間程度の期間を指定。前年度の学習内容や前年度に対する質問項目のため、年度初めの5月にしている。

4 調査結果の概要（令和3～5年度）

(1) 学力レベルの経年変化（伸びの状況）

全ての学年・教科で、学年が上がるごとに着実な学力の伸びが見られる。



(2) 学力が伸びた児童生徒の割合

昨年度の学力からの伸びの値が、1以上であった児童生徒数を受験者全体で割った値を、「学力が伸びた」児童生徒の割合として示している。学力の伸びは、児童生徒一人ひとり、あるいはその学年の傾向で時期やタイミングが異なっているが、各学年を平均すると、以下のような割合である。各学年の担任は、該当学年・個人のデータを基に、伸ばした子の割合が上がるように、指導の工夫・改善をしていく指標の1つとしている。

	国語	算数・数学
令和3年→令和4年	70.1%	69.9%
令和4年→令和5年	73.7%	67.3%

【国語】

- ・約7割の児童生徒の学力が伸びている。
- ・小学4年生の1年間、5年生の1年間で学力を伸ばした児童が増えた

【算数・数学】

- ・約6～7割の児童生徒の学力が伸びている。

(3) 学力の伸びを支える学級風土について

肯定的な回答をしている各学年の児童生徒の割合を平均したものである。約9割の児童生徒が肯定的な回答をしている。「(前学年の時)学校の先生たちは自分のよいところを認めてくれましたか」「(前学年の時)学校の友達は自分のよいところを認めてくれましたか」の2項目については、微増傾向にある。肯定的な回答をしていない児童生徒のデータを見て個別の支援策を考えたり、学級のデータから学級の雰囲気づくりや指導の工夫・改善をしたりしている。

質問紙<学級風土> 肯定的な回答をしている割合			
	(前学年の時)学級での生活は楽しかったですか	(前学年の時)学校の先生たちは自分のよいところを認めてくれましたか	(前学年の時)学校の友達は自分のよいところを認めてくれましたか
令和3年	92.0%	90.5%	89.7%
令和4年	90.9%	91.5%	89.0%
令和5年	89.6%	91.7%	90.7%

(4) 学力の伸びを促す「主体的・対話的で深い学びの実施」「学習方法」について

「主体的・対話的で深い学びの実施」「学習方法」については、複数の質問項目から調査しており、児童生徒がそうした学びや学習方法を「実施している」と感じているほど「5.0」に近づき、否定的な回答が多いほど「1.0」に近づく。

学校、学年、個人、それぞれに傾向が異なり、学校では、それぞれのデータに基づき、指導改善・工夫のための参考値としている。本報告書では、次年度の参考となるよう今年度の結果のみを示している。

学年	主体的・対話 的で深い学 びの実施	学習方法				
		柔軟的 方略	プランニング 方略	作業 方略	認知的 方略	努力調整 方略
小学5年生	3.7	3.3	3.4	3.3	3.3	3.8
小学6年生	3.6	3.3	3.3	3.2	3.8	3.7
中学1年生	3.8	3.4	3.4	3.4	3.8	3.8
中学2年生	3.5	3.2	3.2	3.3	3.4	3.5
中学3年生	3.6	3.4	3.3	3.3	3.6	3.4

令和5年度結果より

(5) 学力の伸びを促す「非認知能力」について

「非認知能力」については、全学年で調査している「自己効力感」の項目と、学年ごとに経年で測っている項目について整理して示している。このうち自己効力感とは、「非認知能力」の中でも、特に相関の高いものとして、本調査では重視している項目である。「非認知能力」も、学校、学年、個人、それぞれに傾向が異なるため、それぞれの傾向にあった指導や支援を講じることとなる。本報告書では、次年度の参考となるよう今年度の結果のみを示している。非認知能力を教育活動全体で伸ばすために工夫改善の参考値としている。

学年	非認知能力				
	自己効力感	勤勉性	向社会性	やりぬく力	自制心
小学校5年生	3.3	-	-	3.1	-
小学校6年生	3.4	-	2.8	-	-
中学校1年生	3.3	3.3	-	-	-
中学校2年生	2.9	-	-	-	3.5
中学校3年生	3.0	-	2.9-	-	-

令和5年度結果より

5 各校の調査結果を活用した取組事例

モデル校では、後出する7(2)イに示す、活用研修会の中で、学年・学級・個別の調査結果をもとに、それぞれの実態や傾向、特徴を捉え、どのように指導の改善・工夫をしていくのかについて話し合い、学年・クラスの集団としての伸び、個別の伸びを促す方法を検討している。学力向上に係るそれぞれの傾向や特徴へのアプローチは、目の前の児童生徒に合わせたより良い取組になるように工夫されている。

<酒匂小学校の取組>

酒匂小学校では、令和4年度から校内研究で国語について研究を始め、指導の工夫・改善に取り組んでいる。令和4年度の結果を受け、学力の伸びを促す項目について、各学年の傾向や特性に応じた取組をし、さらに校内で国語科の指導の工夫・改善を行った。令和4年度から令和5年度に学力を伸ばした児童が多く、伸びの平均も高い結果となっている。

R4→R5	5年生 4年生の1年間で伸ばした子の割合	6年生 5年生の1年間で伸ばした子の割合	中学1年生 6年生の1年間で伸ばした子の割合
国語	92.7%	79.2%	87.2%
伸びの平均	5	4	3

学年	伸びを引き出した効果的な取組(学力の伸びを促す項目について)
4年生	<p><u>安心して学び合う学級・雰囲気づくり</u>ができた。<u>相手意識を高め、かかわりを増やしたり、相互に振り返る時間を取ったり</u>し、良いところを互いに認め合うことができた。</p> <p><u>長期的な目標を立てて振り返り、やり抜く力・自己効力感</u>を感じられるようにしたことから、非認知能力を高めることができた。</p>
5年生	<p><u>学習課題の提示の仕方を工夫してきたこと</u>で、見通しをもって課題に取り組む<u>(プランニング方略)</u>ことができた。</p> <p>努力調整方略が弱かったので、今後は、どうすれば自分を高められるかを考える力を養っていく。そのために、柔軟的方略と合わせ、<u>自主学習を含め自分なりの学習の仕方を身につけられるように</u>していく。</p>
6年生	<p><u>生活習慣と合わせ、自主性を育む</u>ことで、やるべきことをきちんとやる力である<u>勤勉性(非認知能力)</u>を育むことができた。</p> <p>「人に何かをやってもらった」から「<u>相手にもしてあげる</u>」へ<u>声掛け</u>をした。そのことで、友達が自分の良いところを認めてくれた喜びが増え、<u>学習の雰囲気</u>が良くなった。</p>

校内で行った国語科の指導の工夫・改善の取組

A 意図的に理解の「ずれ」をそろえたり、生かしたりする仕掛けづくり

作品全体を捉える際に「センテンスカード」や挿絵を使い作品の流れを捉えるようにする。

B which 型発問でより多くの児童の主体的な参加

「なぜ」「なにか」「どのように」では発問の難度が高い傾向もあるので選択肢やどれが一番かを考えさせ、誰でも選択・判断しやすい活動から学習に主体性を持たせる。

C こま目に少人数で話し合う場を設け、理解を揃えたり考えを深めたりする

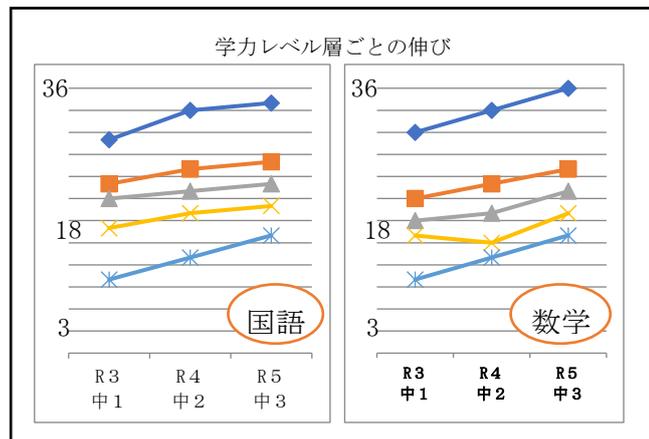
話し合う形態を「ペア」「3人組」「ワールドカフェ」などその都度換えていく。相違点や共通点に気づきやすくする。

D モデル掲示・視覚化でスッキリ化

何となく思いつくが言語化できない場合を考え、ある程度考えがはっきりしている児童をモデルケースにしたり、教師がそのモデルケースになったり伝えるようにする。

< 泉中学校の取組 >

泉中学校では、「主体的で深い学びにつながる学習活動のあり方～学ぶ力を引き出す授業づくり～」のもと校内研究に取り組んでいる。令和3年度から4年度の伸びの結果を踏まえ次のように分析した。学力の高い順に並べたとき、学力の高い層の学力の伸びは良い。しかし、中央値から低い層に関しては、学力の伸びは低い。特に中央値の伸びは小さく、測定結果が下がっている場合もある。これについて次のように手立てを考えた。



- ◆ ⇒ 最大値(最も学力が高い児童・生徒が属する学力レベル)
- ⇒ 75%値(学力の高い順に並べたときに、上から数えて25%にあたる児童・生徒が属する学力レベル)
- ▲ ⇒ 中央値(学力の高い順に並べたときに、上から数えて50%にあたる児童・生徒が属する学力レベル)
- × ⇒ 25%値(学力の高い順に並べたときに、上から数えて75%にあたる児童・生徒が属する学力レベル)
- * ⇒ 最小値(最も学力が低い児童・生徒が属する学力レベル)

- ① 教科ごとに聞かれている勉強が好きですかという質問に関して、肯定的な回答が低い。「勉強が好き」と思うことができれば、探究心も高められより深い学びにつながっていき、学力を伸ばすことができると考えた。
- ② 学力の低い層に関しては、IT や少人数で教師側の支援を充実できるように指導してきた。しかし、中間層の学習に対する支援は、教師側からの支援は難しい。そこで、本年度は、中間層の生徒の学習における仲間とのかかわり方に視点を持ち、校内研究等で授業観察をし、学年で指導について協議した。
- ③ ステップアップ調査と併せて、学級集団を把握するためのアセスメント調査（Q-U）の結果を活用し、学級内の小グループ同士の連携の様子・生徒同士の序列・学級の一体感・学習に向かう姿勢などを把握し、仲間同士のかかわりの中で互いの学ぶ力を引き出し、主体的な学習活動の展開に生かすようにする。

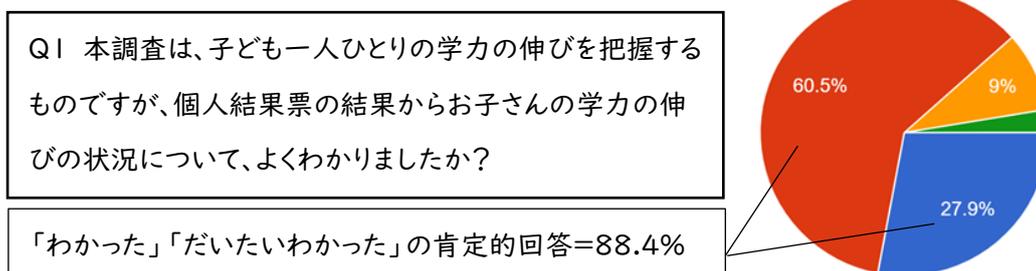
これらの手立てを職員で共有し、令和4年度に取り組んだ結果、令和5年度の中学3年生の質問紙項目は以下のように伸び、数学については、伸びの平均が3となり、8割の生徒を伸ばすことができた。

領域		質問	R3	R4	R5
学級風土	1	学級での生活は楽しかったですか	93.8	91.5	89.6
	2	学校の先生たちは自分のよいところを認めてくれましたか	91.2	93.5	96.5
	3	学校の友達は自分の良いところを認めてくれましたか	89.8	92.6	96.5
主体的で深い学びの実施	4	授業の始めに、今日はどんな学習をするのかをつかんでから学習に取り組んだこと(国語)	70.8	67.3	61.8
	5	課題の解決に向けて、話し合ったり交流したりしたことで、自分の考えをしっかりとるようになったこと(国語)	68.7	76.2	77.8
	6	授業を通して学んだ内容について、さらにくわしく知りたい、学びたいと思ったこと(国語)	68.7	53.8	56.3

※赤字が R4 より上昇した数値

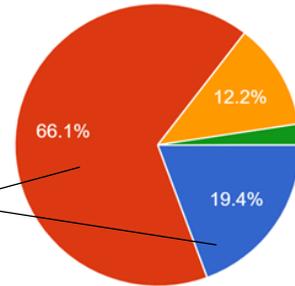
6 保護者の声（保護者アンケートより）

モデル校のステップアップの調査実施学年の全保護者（1,839 件）を対象に、令和5年10月にアンケートを行った。うち回答数は501件である。

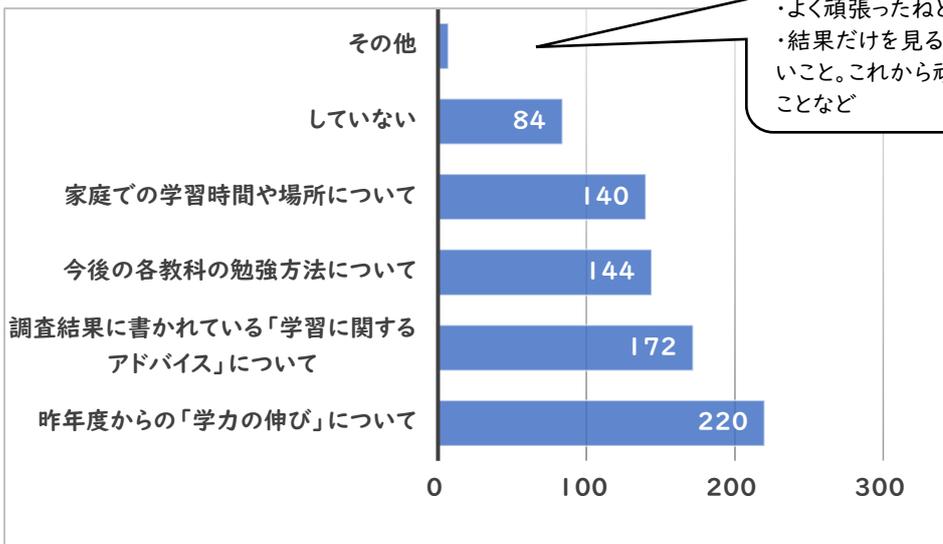


Q2 個人結果票に記載されている学習のアドバイスについてはわかりやすいものでしたか？

「わかった」「だいたいわかった」の肯定的回答=85.5%

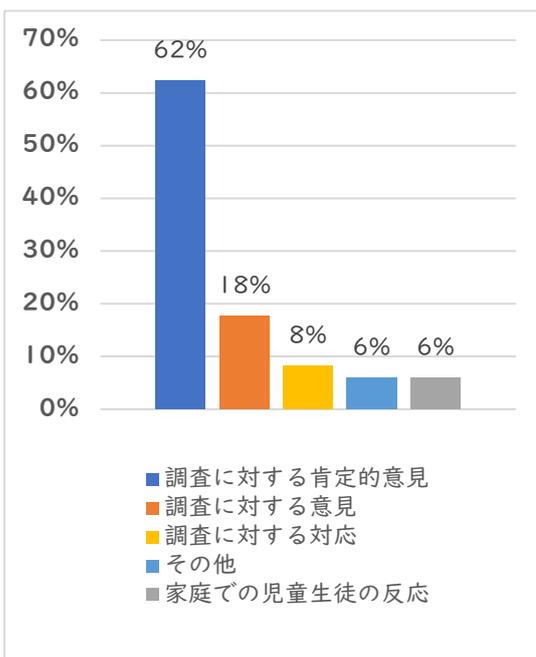


Q3 調査結果を受けて、学習についてご家庭でお子さんとどんな話をしましたか？(複数選択可)



・よく頑張ったねとほめた
・結果だけを見る調査ではないこと。これから頑張ると良いことなど

Q4 小田原市は一人ひとりを伸ばす視点を大切にした教育を推進しています。ステップアップ調査についてのご感想やご家庭でのお子さんの様子等をお聞かせください。(自由記述)



<調査に対する肯定的意見の例>

- ・ステップアップ調査をすることにより、昨年からの学力の伸びを本人が確認でき、次への頑張りが(意欲)につながっているようです。
- ・自分が頑張った分、成長が目に見えて理解できたので日々の勉強に生かせるようになってきました。
- ・子供自身が、結果を見てどこが苦手なのかがはっきりとわかるので、これからの勉強の参考になる。
- ・結果の返却時期に面談もあったことで、子供と今後の勉強の仕方を話し合ういい機会になった。これをきっかけに、以前より意欲的に机に向かうようになりました。
- ・AIによるアドバイスは、先生、親が思っていた事と同じ内容で、ちゃんと反映されていると思いました。

これらのアンケート結果から、個人結果票の返却を通して、保護者にもステップアップ調査の結果が伝わっているものと捉えることができる。また、勉強の苦手な子も得意な子も、平均と比べてではなく、昨年度からの学力の**伸びが分かる良さ**を感じている保護者が多くいる。同時に、**児童生徒のやる気の創出や、親子での学習に係るコミュニケーションの機会の提供**につながっていることも自由記述などの回答からわかった。

7 モデル校への支援

(1) ステップアップ調査についての説明

モデル校としてスタートした初年度は、各校でステップアップ調査の特長や実施方法について、指導主事が各校の教職員に対し直接説明を行った。直接説明することで、その場で出た質問に答えることもできた。2年目以降は、9月～10月に行う活用研修の中で、ステップアップ調査の特長を整理して簡潔に触れるなど、職員の入替わり等の学校の状況等に応じて説明を行ってきた。

また、保護者に対しては、本調査に対する理解を促すリーフレットを作成し、さくら連絡網で年度初めに配信した。

保護者の皆様へ

「ステップアップ調査」を実施します。
(※一部の小中学校をモデル校として実施)

小田原市では、
小田原市教育委員会
教育指導課教育研究所

**子どもたち一人ひとりの成長を支え、
一人ひとりを確実に伸ばす教育を進めます！**

大切なことは、一人ひとりのお子さんが
「どれだけ成長できているか」です！

小中学校の段階は、お子さんたちの「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む大切な時期です。お子さんたちを見ると、伸びる時期やスピードは様々ですが、一人一人は確実に成長しています。

本市では、お子さんたちが現在の学力を知り、「どれだけ自分が伸びたか」を実感し、自信を深めていくことを大切にしたいと考えています。そして、自信をもったお子さんたちが、自分をさらけ出し、自分のよさを生かしているよう、効果的な指導方法を発掘し、学校、市が共有しながら子どもたちの成長につなげていきたいと思えます。

本調査は、「学習した内容がしっかりと身につけているのか」という視点だけでなく、「一人ひとりの学力がどれだけ伸びているのか」という視点を加えた調査です。

★★ペーパーテスト★★
(教科に関する調査)

学習の積み重ねが「学力の伸び」につがいます！

毎年この調査結果を見比べることによって、1年間の学習の積み重ねが「学力の伸び」として見られます。
(※「学力の伸び」は小中学校5年生以上の結果から見るができます。)

★★アンケート★★
(子どもたちへの質問紙調査)

「自己肯定感」「学びに向かう意欲」「規律ある態度」も大切なのです！

子どもたちの成長にとって大切な「自己肯定感」や「学びに向かう意欲」、「規律ある態度」等も見られます。

☆☆ 調査の内容 ☆☆

○調査実施日：令和5年 5月 9日(火)～17日(水)
※学校によって実施日が異なります。

○調査対象： 小学校4年生～中学校3年生

○調査事項

(1) 教科に関する調査：2教科(国語、算数・数学) ※前学年までの内容
(2) 質問紙調査(アンケート)：学習意欲、生活習慣等に関する事項
○結果の返却：令和5年9月以降(子どもたち一人ひとりに個人票を提供します)

☆☆個人票について☆☆

個人票には、以下の内容等が記載されています。

- ① 学力のレベル
※前年度と今年度のバーの位置を比べることによって、自分の学力の伸びを把握することができます。
- ② 学習に関するアドバイス
- ③ 教科の領域別正答率
- ④ 全体の正答率分布図

その他、生活習慣に関わる項目の達成状況等、記載しています。

「よいところ」「努力が必要なおとこ」を把握して、さらに成長するためにどうするか考えることが大切です。
学校でも家庭でも、子どもたちの成長したところを認め、温かく見守っていきましょう。

国語 教科に関する調査結果

今年度の学力の順位

あなた(の)の学力は、レベル4の中で伸びたのか？

学年	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
今年度	10	20	30	40
前年度	15	25	35	45

※前年度と今年度のバーの位置を比べることによって、自分の学力の伸びを把握することができます。

学習に関するアドバイス

あなた(の)の学力は、レベル4の中で伸びたのか？

あなた(の)の学力は、レベル4の中で伸びたのか？

あなた(の)の学力は、レベル4の中で伸びたのか？

教科の領域別正答率

教科	算数	数学	国語
今年度	80%	75%	70%
前年度	75%	70%	65%

進捗率の正答率分布

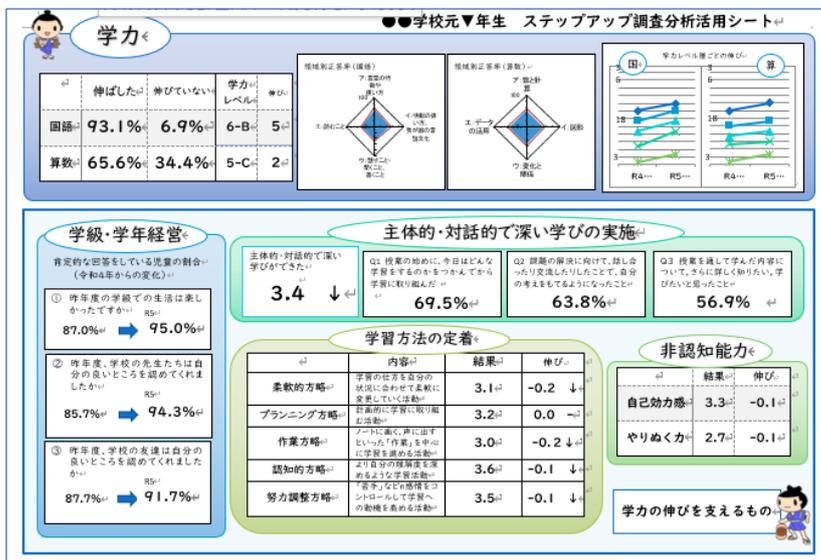
あなた(の)の学力は、レベル4の中で伸びたのか？

(2) 活用促進

調査結果を児童生徒・教職員が正しく活用し、一人ひとりが学力を伸ばすことを可能にするため次の支援を行った。

ア 活用のための帳票作成・提供

委託業者より学校へ直接送付される帳票の量が膨大で、必要な部分の抽出が難しい上に見づらく、各校各学年で結果を活用するためには、提供されたデータを見やすく整理し、教育委員会で加工する必要がある。各学校の各学年に、「学力」「学年・学級経営」「主体的・対話的で深い学びの実施」「学習方法の定着」「非認知能力」のカテゴリーに**必要なデータをまとめ、各学年に関わる教職員が、一目でそれらを把握できる調査分析活用シート**を作成した。



さらに、学年の傾向で捉えるだけでなく、児童生徒一人ひとりのデータについては、学年で特に伸ばせた児童生徒・特に伸ばすことができなかった児童生徒の一覧（個別支援分析シート）を作成

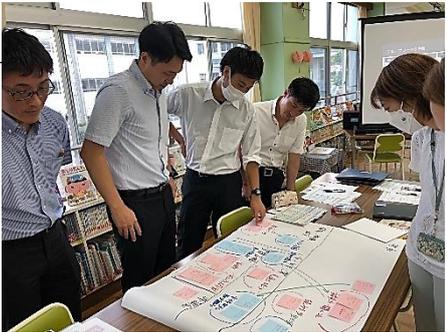
学年	学級	児童生徒	学力		学年・学級経営		主体的・対話的で深い学びの実施		学習方法の定着		非認知能力	
			伸び	伸び率	伸び	伸び率	伸び	伸び率	伸び	伸び率	伸び	伸び率
1	1	1	
1	2	2	
1	3	3	
1	4	4	
1	5	5	
1	6	6	
1	7	7	
1	8	8	
1	9	9	
1	10	10	
1	11	11	
1	12	12	
1	13	13	
1	14	14	
1	15	15	
1	16	16	
1	17	17	
1	18	18	
1	19	19	
1	20	20	
1	21	21	
1	22	22	
1	23	23	
1	24	24	
1	25	25	
1	26	26	
1	27	27	
1	28	28	
1	29	29	
1	30	30	
1	31	31	
1	32	32	
1	33	33	
1	34	34	
1	35	35	
1	36	36	
1	37	37	
1	38	38	
1	39	39	
1	40	40	
1	41	41	
1	42	42	
1	43	43	
1	44	44	
1	45	45	
1	46	46	
1	47	47	
1	48	48	
1	49	49	
1	50	50	
1	51	51	
1	52	52	
1	53	53	
1	54	54	
1	55	55	
1	56	56	
1	57	57	
1	58	58	
1	59	59	
1	60	60	
1	61	61	
1	62	62	
1	63	63	
1	64	64	
1	65	65	
1	66	66	
1	67	67	
1	68	68	
1	69	69	
1	70	70	
1	71	71	
1	72	72	
1	73	73	
1	74	74	
1	75	75	
1	76	76	
1	77	77	
1	78	78	
1	79	79	
1	80	80	
1	81	81	
1	82	82	
1	83	83	
1	84	84	
1	85	85	
1	86	86	
1	87	87	
1	88	88	
1	89	89	
1	90	90	
1	91	91	
1	92	92	
1	93	93	
1	94	94	
1	95	95	
1	96	96	
1	97	97	
1	98	98	
1	99	99	
1	100	100	

した。委託業者から送付される結果は、個人の氏名を業者に提供していないことから、教育委員会で個人番号と氏名を紐づけて一覧にし、個別の支援に活用できるようにした。

イ 活用研修の実施

教育委員会で作成した活用のための帳票をもとに、各学校で9月～10月の放課後

に1時間から2時間、校内研究会全体会として調査活用研修会を行った。

活用研修会内容	
① ステップアップ調査の特長の確認	
② 学年分析シートの見方の理解	
③ 学年ごとのグループワーク	
・ 学年分析シート学年の学力の伸び、それを支える要素の状況の共通理解	
・ 把握した状況から考えらえる指導の効果及び今後の指導の改善点について協議・記録	
・ 協議内容の共有	
④ 個別分析支援シートの見方の理解	
⑤ 学年ごとのグループワーク	
・ 個別の支援の検討	



協議で考えた内容について
日々の授業や指導で実践

これらの研修を行うことで、結果を踏まえた指導の工夫・改善を考える場に一人ひとりの教員が臨み、同僚と協議して考えた継続すべき指導・対応策や改善策を次の日より実践に反映させていく、つまり「PDCAサイクルによる指導改善」を可能にしている。

ウ 中学校区研修会における指導改善に向けた講話の実施

小中学校で児童生徒一人ひとりを伸ばすという共通課題のもと、連携を密にした教育活動の展開を目ざし、中学校区で研修会を行っている。中学校区研修会では、中学校区の幼稚園・小学校・中学校の教職員（3校1園）が校種をまたいで授業を参観して学び合う。さらに、中学校区で教育観や目指す方向を同じにするために、共通の講話を聴く場が設定されている。中学校区の依頼を受け、ステップアップ調査の調査項目である非認知能力や主体的・対話的で深い学びをテーマに講話をしていただく講師をコーディネートした。

講師には、各中学校区の学校の授業や学校の様子を見ていただき、細かな指導助

言をいただくと共に、授業の在り方や授業の中で育つ非認知能力についても詳しく説明をしていただいた。

8 モデル実施を通して見えた成果

成果と課題については、11月に提出されたモデル校の報告書をもとに、本調査の目的に対し把握できた成果と課題をまとめた。

(1) 教職員の意識の変容

学力の伸びを支える「非認知能力」「学習方法の習得」「主体的・対話的で深い学びの実施」「学級学年経営」について、これまで教員の感覚で捉えていたものが多いが、これらの項目を数値化することで、エビデンスに基づく検討が可能になった。その結果、各モデル校からの報告書にも以下のような記載があった。（6校中4校）

- ・非認知能力に着目して指導をしたら、作業方略と自己効力感が伸びた。学力だけではない部分に目を向けられたことは良かった（作業方略+0.5 自己効力感+0.4）
- ・主体的に学び、仲間と関わって学ぶには、学級経営が重要であると意識するようになった（主体的・対話的で深い学びの実施 児童生徒の「問い」の設定の工夫 ⇒+0.4）
（友達は自分のことを認めてくれる 児童生徒同士の言葉かけの工夫 79.2%⇒89.3%）
- ・教職員が非認知能力に着目するようになった。一人ひとりの見とりも、そうした非認知能力（粘り強さ・自制心など）に着目することが多くなった。

学習内容の習得だけでなく、様々な要素を大切に児童生徒一人ひとりを伸ばす意識が、モデル校の教職員に広がってきたことは大きな成果の1つである。

(2) 児童生徒に合った指導や言葉かけ

児童生徒の結果は経年で捉えるため、学力が高くても伸びない場合、学力が低くても伸びている場合がある。これまでの学力調査では、結果そのものを評価し、「できた」「できない」部分を捉えて児童生徒にフィードバックしてきた。しかし本調査を実施したモデル校では、点ではなく線を捉え、そこまでのプロセスや努力を大切にフィードバックすることができている学校が多く見られる。それぞれの児童生徒の結果の詳細に応じた言葉かけをしたり、個別に具体的な支援をしたりした例が報告されている。また、校内の授業研究の中でも、児童生徒の変容を捉え、共有することを大切にするようになった学校もある。（6校中4校）

- ・「〇〇さんは、算数が伸びた。確かに練習問題でも間違いが少なくなった。」
「□□さんは、国語があまり伸びていなかった。理由はなんだろう…」など、**普段見ても気づかなかった伸びのあった子や伸びが見られなかった子等に気づくことができ、認める言葉かけをしたり原因を考えたりすることができた。**

例 学力が高くても伸びていない子 A さん (国) ±0 (数) ±0

人間関係の改善・長期的な目標を立て進める学習法の指導 ⇒ (国) +1 (数) +2

- ・調査において、**学年や一人ひとりの伸びや傾向がはっきりするため、児童への見とりを大切に、その子にあった形で学習できるように教職員で心がけることができた。**

例 中間層が伸びていない B さん (国) ±0 (数) +1

学級集団の人間関係の把握 生徒間の協働による学びの充実 ⇒ (国) +3 (数) +3

- ・ステップアップ調査は、生徒一人ひとりを理解深める資料としてとても有用であった。校内研究の研究授業の際、ステップアップ調査とQ-U調査の結果を基に、研究に沿った抽出生徒を選び、**個々の学びの変容を共有**することができた。

(3) 児童生徒の意欲の創出

本調査は、平均と比べず、前の自分との比較により「伸びた」「伸びない」を把握することができる。全体の中の自分の位置では、約半分の児童生徒が平均以下となる。学力が高い・低いに関わらず「伸び」が見られた児童生徒にとっては手ごたえを得ることができる。その手ごたえから、「自分を伸ばすために何ができるのか」「昨年度1年間の自分の学び方はどうだったか」という内省が行われることで、自己調整を育むことを目指す。モデル校からもそうした児童生徒の様子が報告されている。

(6校中4校)

- ・教員が結果から**分析したことをもとに手立てをうつことができた**ため、その適切な支援や言葉かけによって**児童のやる気を高めることができて**いる。特に国語では、児童のやる気の創出と共に前年度からの大きな伸びを見ることができた。

例 国語で学力を伸ばした子の割合 53.1%

・センテンスカード等を使った文章構成を捉える指導等

・誰でも参加できる発問の工夫 (学習意欲の創出)

・自分の力を伸ばす努力調整方法の指導 (やる気を引き出す言葉かけ) ⇒ 79.2%

- ・ **生徒の成長、得意な分野などを明確に示す**ことができるので、**意欲の向上**に繋がった。
- ・ 生徒へ結果を返却するとき、**生徒は以前の自分と比べながら、これまでの学習に対する取り組みを振り返っていた**ところが良かった。
- ・ 勉強が苦手な子が、伸びた自分に喜び、学習に関するアドバイスを読む様子が見られた。

(4) 小中で連携した指導の実施

モデル実施の3年間で、初年度の5年生・6年生は、中学校に行っても経年の学力の伸びを捉えることができました。そのため、**同じ学年集団、あるいは児童生徒について小学校教員と中学校教員が学力の状況等を共有**し、これまでの指導の経緯や工夫を中学校へ引き継ぐことが可能になった。また、中学校区で捉えられる傾向等を把握し、**中学校区全体としての取組を強化**することができる。モデルの中学校区はいずれも小学校の卒業生が分散することなく学区の中学校へ行くため、その手立てが取りやすかったことも関係していると考えられる。（6校中3校）

- ・ **中学校区全体の状況について理解を深める資料**としてとても良い調査であった。本中学校区では、どの学年も共通して中間層の伸びが低くなる傾向にある。そうした傾向を共有すし協議することで、**小中の連携が深まった**。また、**小学校から中学校への引き継ぐときの資料としても有効**であったと実感している。
- ・ 中学校区で、**非認知能力を伸ばすことの大切さを共有**できて良かった。特に、非認知能力をテーマに中学校区で講師を呼んで講話を聴き、授業のめざすべき方向を同じにできたことも効果的であった。

9 モデル実施を通して見えた課題

(1) 教員の負担

年度初めだけでも実施マニュアルの読み込み・調査資材の受け取り・確認・仕分け・管理番号と個人の紐づけ等の準備や当日の実施等の作業を行う。結果の返却時も同様である。**教員の負担が増えた**ことは大きな課題である。調査実施に係る作業の効率化に関する記載も多くあった（6校中4校）

- ・ステップアップ調査の準備・事後処理をスムーズにできるようにしたい。調査の個人番号と結果の紐付けが、非常に大変（特に中学1年）である。名前と個人番号が紐付けした状態で、エクセルファイルと個人番号シールを配付してほしい。
- ・番号だけの紐付けでデータが処理されているが、氏名を記入してそれも反映されるような形にできないものか。**氏名印を押すなどの煩雑な業務が何度もある。**

(2) 中学3年生の調査結果の活用について

結果の返却・結果を活用する研修会が9月、実際に授業や指導に生かすのは10月以降となることから、**調査結果を指導に生かす期間が中学3年生は極端に短い**。モデル校の報告には、**結果の返却時期を早める要望等**も記載がある。（6校中2校）

- ・調査実施から結果が生徒の元に戻るのに時間がかかりすぎる。
- ・分析に時間と手間がかかるので、そのための時間の設定が必要である。夏季休業中に結果が分かれば、それに合わせて研修や作業を行う日を夏季休業中に設定することができる。

(3) 提供される帳票の読み取りや分析

学校へ直接送付される帳票の量が膨大で、**必要な部分の抽出が難しい**上に見づらく、各校各学年で結果を活用するためには、提供されたデータを教育委員会でさらに加工する必要があった。（6校中2校）

- ・現在は、教育委員会が見やすい資料を提示し、研修を行っているためできているが、**自分たちで帳票から必要な部分を選び取り分析することは不可能**に近い。
- ・**データの量が膨大でわかりづらく**分析に大変時間がかかる。教育委員会が資料を作成したことで対応できたが、**学校単独での対応となるとかなり厳しい**。

(4) 全国学力・学習状況調査との重なりによる負担

小学6年生及び中学3年生は、全国学力・学習状況調査実施から約1か月後に本調査の実施日となった。調査が重なることが**児童生徒に負担**であるという報告があった。また、結果返却も含め時期が重複することで、対応が不十分になりかねないと不安の声も

ある。(6校中3校)

- ・調査の実施や分析時期が、全国学力学習状況調査と重なっており、大変な負担になる。どちらかを実施し分析していく方が成果を上げられると考える。
- ・全国学力・学習状況調査もある中で生徒、職員の負担増が大きい。生徒にとってはステップアップ調査の方がメリットは大きいので、何らかの方策を取ってほしい。

10 令和6年度以降の調査実施について

先述のモデル実施における成果と課題から、ステップアップ調査のよさを理解しつつも学校現場からは実施に対して負担が大きいという意見が見られた。令和6年度以降の調査については、次のとおり**負担軽減の措置をとることが、持続可能な取組になるためにも必須である。**

(1) 実施方法

- ・全小中学校で、2教科(国語、算数・数学)と質問紙の実施
- ・小学4年生から中学2年生までを調査の対象とする。 →課題(2)
※ただし、令和6年度については、中学1年生までの調査とする。
(モデル校を除く)
- ・CBT(コンピューターベースでのテスト)による実施 →課題(1)

令和6年度より、MEXCBT利用によるCBT(コンピューターベースでのテスト)に切り替えることで、調査資材の受け取り・確認・仕分け・配付・回答の収集・配送等の作業がなくなる予定である。個人番号と個人名の紐づけについては、同調査をおこなっている他自治体や委託業者と連携を取りながら、より良い方法について検討していく。また、中学3年生については、委託業者からの結果の返却時期の改善が見込めず、活用期間が短いことから、調査の対象としない。

(2) 実施・活用支援

- ・新規導入校へのオンライン研修の実施
- ・マニュアルや伝達事項についての校務支援システム上での情報共有
- ・調査分析活用シート・個別支援分析シートの提供による各校での確実

な活用

→課題（3）

・活用分析シートに基づく36校への活用研修の実施

課題（3）にあるように、膨大な帳票からの読み取りなく、必要なデータを集約し、各校各学年で活用しやすい分析シートを教育委員会で今後も提供していく。また、児童生徒の結果を確実に把握し、活用できるように指導主事が各校に行き、活用研修を行っていく。

令和6年度に新規導入校向けには、ステップアップ調査の目的や内容、調査の特長、実施方法等、初めてでも分かるようオンラインで研修を実施していく。

（3）検証体制

1年間の指導・授業の工夫改善が、どれくらいの児童生徒を伸ばすことにつながったのか、実施2年目以降からは学力及び学力を支えるものの「伸び」を把握し、調査活用の効果を検証していく。